

滴

〽
三浦惠美助物語
〽

第一章
幼少期

昭和4年11月20日。

その日、三浦家は神聖なる空気に包み込まれていた。

姉のきねこは何かを予感させる空気の中で、そわそわとしてその時を待っていた。

座敷では産婆さんがすでに母のクマにつきつきりになっており、父の兵助も気がでない様子である。

「弟なら、お父さんもお母さんも、きつと喜ぶ」

幼いながらもきねこはそう思い、男の子が生まれることを願っていた。

産婆さんの勇ましい声と、クマのおよそ女性らしからぬ踏ん張りの声がおんぼろの屋敷を振るわす。

「がんばって、がんばって。お母さんも、生まれてくる赤ちゃんもがんばって」

きねこは小さな手を合わせてそう祈っていた。

昭和4年と言えば、西暦に直せば1929年のことである。

つまり、それは世界恐慌が始まった年。

1929年10月24日、ニューヨーク証券取引場で株価が暴落し、それをきっかけとして資本主義の負の側面、恐慌が現実のものとなる。なすすべもなき、負の連鎖。やがて世界は未曾有の大戦へ否応なく突き進むこととなる。

これはそんな時代の話である。

三浦家全員の願いが通じたのか、座敷からは元気な赤ん坊の声が聞こえてきた。

それはそれは、力強い泣き声だった。

「うまれた！」

きねこは我慢できずに、母のいる座敷へと駆け込む。兵助もその後が続く。

産婆さんが取り上げていたのは、元気に泣く、珠のような男の子であった。

ニューヨーク、ウォール街において株券が紙くずと化してからおよそ一ヶ月後、大日本帝国は宮城県栗原郡有賀村（現・栗原市若柳）において、こうしてひとりの男子が誕生した。三浦家にとって待望の男子であり、また後世から見ればその男子は三浦家の隆盛を担う、運命の子となる。

産婆さんはへその緒を切って、布にくるみ、母親のクマへとその子を渡す。

「今日、11月20日は恵比須講の日だったか、エビスコウをちよつと変えて、エミスケという名前がいいんでねえべが？」

そう言う産婆さんに対して、兵助もクマも首をかしげる。

「エミスケ？」

そう、と産婆さんは笑顔でうなずき、宙にその文字を書いてみせる。

「三浦恵美助」

兵助にもクマにも、その字が何となしに座りがいいように思えた。それに、そのようなハイカラな名前の方が、幸運を引き寄せるのではないかと思えた。

だが、太郎や二郎などが当たり前だったその時分、その名前はあまりにハイカラであった。

小学校などで「みうらえみすけ」と先生に呼ばれると、クラス中はその珍しい響きにどっと沸いたという。

「呼ばれるたびに、みんなに笑われてや、俺は嫌だったんだ」
そう本人も述懐するところである。

つまり個性的でハイカラな名前であったが、当の本人にしてみれば迷惑以外のなものでもなかったのである。

この名前が後に、選挙カーの拡声器によって、ミウラエミスケ、ミウラエミスケ、と町中に響き渡り、人々の記憶に残ることとなるのだが、それはまだ後の話である。

恵美助が生を受けた三浦家の起源については諸説入り乱れているが、源頼朝の奥州征伐に関東から付き従った三浦某がそのまま土着したという説が有力かと思う。現在の神奈川県三浦半島において勢力を誇った三浦氏が、遠い先祖と言うことになる。つまり、源平藤橘で言えば、平氏であり、数ある平氏の中でもその平氏は京都遷都で名高い、桓武天皇が源流である。

鎌倉時代から室町時代、そして戦国時代の奥州の霸王、伊達政宗の時代には完全に土着し、ほとんど百姓であったと推測される。

その証拠に恵美助が生まれた当時の三浦家は小作人であった。小作人とは地主から田を借りて米を作る、江戸時代の土農工商で言えば真正正銘の「農」ということになり、相当に窮していたこととなる。

働けど働けど我が暮らし楽にならずの境遇である。

恵美助が誕生するまで、三浦家では不幸が続いていた。恵美助の父兵助と母クマの間には、男子三名と女子一人がすでに生まれていたが、恵美助にとって姉であるきねこをのぞき、すべて幼くして亡くなっていたのだ。

栄養状態が悪い時代であり、医者には死ぬ時しかかかれなかったという時代の話であるから、東北の農村において幼い子供が亡くなるということ自体は決して珍しい話ではなかった。ただし、長男、次男、三男と立て続けに亡くなるという話はそう多くはない。そこで、両親をはじめとする一族は、恵美助の誕生をして、負の連鎖を断ち切ろうとしたのだ。本当は四男である恵美助に、そのようなハイカラな名前を与え、次に生まれた五男に「兵二」、六男に「三郎」と名付けたことから、そのことは伺える。そういうことで、恵美助に対する期待は当初から相当のものであった。三浦家にとつての希望。それが恵美助であった。

当の本人が自分が長男でなく、四男であったことを知ったのは、長じてからの話であり、戸籍を見たときには、ただでさえぎよろりと大きな目がこぼれ落ちそうになったという。

一族の期待通りに、恵美助は壮健に育った。そればかりではなく、恵美助が通った有賀小学校大袋分校において、級友の中で抜きん出た成績だった。ただし、運動神経がよくなかった。それが幾子、崇典と三浦家の直系に負の遺伝子として継承されていくことになる。

三浦家嫡男として育てられた恵美助は早くから責任感の強い子供に育つ。自分が三浦家を引っ張っていかねければならない、という想いが幼い頃からあったのだ。

一方で、子供らしいやんちゃな側面を持ち合わせていた。

昔の農家には藁で縄を緋う習慣があり、そのために各家には縄緋え機械なるものがあつた。鉄などの金属と木材でできたものだった。長屋に置かれたこの物体を見た、幼い恵美助の頭にひらめきが生じた。

「これをぶぐして（解体して）鉄にすれば、飴っこと交換してくれるんでねえべが」

友人の正巳や和夫とともに工具を駆使して、縄縋え機械を少しずつ分解し、一欠片ずつ、朝鮮人の鉄くず集めにそれを渡し、代わりに飴玉を得ていたのである。

なぜ、一度に鉄片を渡してしまわなかったかと言えば答えはこうである。

「んだって、一回に全部渡してしまえば、飴玉は一個しかもらえねえがらや、少しずつふぐして交換してだのっさ」

どうやら、恵美助は少年ながら若干の商才らしきものがあつたらしい。成人してからは数字に長けるようになるのだが、あるいはこのあたりにその起源を見ることができのではないだろうか。

恵美助の言葉をそのまま借りれば、「少しずつふぐして」いたらしいが、無論、少しずつやったところで、縄が縋えなくなってしまうえば父親の兵助が気付かないはずがない。

「こら！ 恵美助！ 何してけつかる！」

烈火のごとく怒つた兵助は、肥を天秤にして担ぐ際に使う肩掛け棒を長刀のように頭上に振りかざし、幼い恵美助を追い立てる。後に、米俵を担いで長屋に入れる際に高い所から転落し腰を痛めてしまうことになる兵助であつたが、この時はまだ若く元氣であつた。しかも、当時としては珍しく長身であり、これも目がぎよろりとしていたから風貌も恐ろしく、追い立てられる方としてはたまつたものではない。

必死に逃げる恵美助であつたが、逃げながらも頭を使った。長い棒をかざす兵助が入りにくい竹藪や小さな路地などを駆使して、何とか逃げおおせてしまうのである。もつとも、その場を逃げられたとしても、夕食時などにひどく絞られたことは容易に想像がつく。

さらに恵美助のいたずらは続く。

恵美助にとって遊び友達の正巳の家は、数代前に恵美助の三浦家から分かれた家である。正巳の三浦家が本家である恵美助の三浦家から分家として見られるのを嫌ったのは、分かれた方が兄で、本家の方が弟だったからである。ゆえに、本家の方では正巳の三浦家を「隠居」と称して、それが今も続いている。

いわゆる「えんきよの正巳ちゃん」は恵美助と同じ昭和四年生まれであるが、早生まれであったために、学年は一個上である。年が近いということもあって、二人は両方の家を行き来してよく遊ぶ仲であった。

正巳の祖父に当たる人は、田尻より婿としてやってきた人で、生家は余程の素封家であったらしい。それだから、正巳の家には当時の農村には珍しい舶来の豪華な時計などが置いてあった。

きらきらと光る美しい置き時計に、恵美助の大きな目が吸い寄せられたのは自然の成り行きであった。しかも、恵美助は「ふぐす」のが大好きな少年であった。

「これはどんな風な仕掛けで動いているんだべ」

そういった好奇心を抱いてしまったのである。

はじめは自分たちで直せる程度に「少しばかりふぐす」つもりだった。ところが、外枠を外し、機械の奥へと進むにつれて、さらに好奇心をそそる機械の内部が明らかになってくるのではないかと、機械の

「ほー、すごいな、こうなってるのか。だったら、この中はどうなってるんだべ」

夢中になって分解を繰り返し、時計の奥へ奥へと進んでいく恵美助。横から見守る正巳にしてみれば、気が気でない。どう見てももう自分たちの力では戻せるレベルの解体ではなくなっていたのだ。

「えみちゃん、もうこの位にした方がいいんでねえが」

機械の虜になってしまっている恵美助には、正巳のその声はもはや遠くに微かに聞こえるのみである。

直すという当初の約束事すら、もう頭の中になかった。とにかく幼いときから「研究熱心」だった恵美助は、さらなる分解を推し進め、ついにゼンマイ仕掛けの核の部分に到達することになる。

それはきらきらと光りながら旋回する、実に美しい仕掛けであった。

ほー、と歓喜の声を上げ、もう飛び出さんばかりに大きな目を見開く恵美助に、ある欲求が衝動的にわき上がってきた。

「これ、触るとどうなるんだべ」

恵美助の人差し指が、引き寄せられるようにしてゼンマイ仕掛けに到達したその時のことであった。

「ぱーんと、弾け飛んでしまったんだもんや」

そう言って笑う、現代の恵美助である。

今となつては確かに笑い話であるが、当時の当の本人達にとっては前代未聞の一大事だった。

「ああっ！」

と、幼い恵美助と正巳は合わせて声を上げる。

直すも何も、時計の核の部分がつっかり弾け飛んでしまったのである。これは大変なことになった。さらに悪いことに、時計の持ち主、正巳の祖父は尋常でないほどに怖い人だったのだ。

こういう時こそ、真の友情が試されるときである。

やつてしまったものは、仕方がない。潔く叱られるか。

そう観念すれば侍の末裔、男の中の男ということになるが、恵美助はまだ幼く、侍ではなく百姓の末裔である。そのとき、恵美助は思いもよらない行動に出る。なんと、自分が引き起こした大惨事の現場から

遁走してしまったのである。

「正巳ちゃん、後はよろしくな」

そう言い残して。

「えみちゃん……」

愕然と恵美助の背中を見送る正巳の胸中にはどんな想いがよぎったことだろうか。少なくとも言えることは、これから先も二人の関係は続いたということだ。もしかして、こういったことが日常茶飯事だったのかも知れない。

その後、正巳が祖父からどのような叱責を受けたかは残念ながら伝承されていない。ただ、事件の後しばらくして恵美助が正巳の家を訪れた時にも、その時計の外枠だけが茶の間に飾られてあつたと言うから、相当に高価な物だったのだろう。

兵助とクマの間には、恵美助の下に女子二人、男子二人が誕生した。

昭和7年12月8日に悦子、その三年後の昭和11年2月5日に明美が誕生した。

それから3年後、恵美助誕生から数えて9年後の昭和14年1月28日には待望の弟、兵二が生まれ、その4年後、昭和18年2月27日には末子、三郎が誕生した。

まだまだ、貧しかった時期であり、三浦家は一丸となってその辛い時期を凌いだ。

第二章 青少年期

すくすくと恵美助が育つ一方で、時代は徐々に混乱を極めていった。

恵美助が2歳になるうかという1931年には満州事変があり、1937年、恵美助が8歳になる年には日中戦争が始まっている。1941年の太平洋戦争開戦時には、恵美助は12歳になっており、その当時のことは鮮明に記憶している。

太平洋戦争も末期になると、B29などのアメリカ軍爆撃機によって本土空襲が本格化する。

宮城県のある村においても、戦争を実感する事件が発生する。

どん、と大きな音と振動が三浦家を揺らした。外に出てみると、東の方の空が赤くなっているのが見えた。

まもなく、大変だ、大変だ、と下の地区の男が大袋中を駆け巡り始めた。

「何したのや？」

兵助がその男の袖を捕まえて聞く。

「石越の方さ、爆弾落とされた！ いよいよ、このあたりも爆撃されるぞ！」

「なんだって？」

三浦家ばかりでなく、大袋集落全体が騒然となった。

これはまずい、防空壕を掘らねばならない。

恵美助や弟の兵二もかり出されて、三浦家総動員で家の前にあった竹藪の根本に、十人ほどは入れるかという防空壕を作った。

栗原郡（現・栗原市）には山間部に細倉鉾山があり、地元の人たちもこれがアメリカ軍に発見されて空襲されることを恐れていた。が、幸い細倉鉾山は終戦まで発見されることがなかった。故に事件はそれとは関係がない。

資料が残っていないので、証言から推測するしかないが、その爆撃機は他の都市に向かう途中だったか、あるいは偵察目的で飛行していたのであろう。

「たぶん、間違って落としてしまったのさ」

そう恵美助が言う通り、おそらくアメリカ軍機は誤って搭載していた爆弾を投下してしまったものと思われる。恵美助の生家からすぐ側の石越に、爆弾が一発落とされたのである。投下された場所が田んぼだったので、被害はゼロであったが、周辺住民に対する精神的な被害は実害以上に大きかった。ついに農村に対する空襲も始まってしまうのかと思つた住民達は、おのおの自宅の庭などに防空壕を作り始めたのだ。今になって思い返せば、完全な徒労であるとはわかるが、情報量が極めて少ない当時してみれば、そう言つた疑心暗鬼に陥ることは無理もないことだった。

また、終戦間際の1945年7月10日にあつた、仙台空襲の際には県の北限にある恵美助の生家からも、空が赤く燃える様子が見えたという。その日、仙台ではB29の爆撃によつて1066名もの尊い命が失われた。

終戦の年、十六歳になろうとしていた恵美助は、そのまま戦争が続けば自分も国のために戦争に行つて戦うつもりだった。今では考えられないことではあるが、それが常識の時代であつた。国のために戦うことは、ひいては家族のために戦うことになる。そのことをこの時代の人々はよくわかつていた。

1945年8月15日、まだ少年であった恵美助は天皇陛下の玉音放送を聞き、涙を流した。何が本当か、わからなくなった。

今まで教えられてきたことは何だったのか。自分が生まれ育った大日本帝国とは偽りだったのか。これからは与えられた情報だけを信じるのではなく、自ら進んで学び、何が本当かを見極めなければならぬ。

この敗戦体験があったからこそ、恵美助は自ら進んで学ぶようになった。近所の誰もが読まないような学術書関係すら手に取るようになった。

確かに、日本は戦争に負けた。そして、当時の国民はその敗北に打ちひしがれた。けれども、皮肉なことにこの敗戦を契機に、恵美助の運命は大きく開けていくことになる。

まずは終戦から一年後の1946年（昭和21年）、GHQの監督下にあった日本政府は、自作農を創設するために大規模な農地制度改革を行う。俗に言うところの農地解放である。これによって、封建時代の昔より、小作人であった百姓達は、自らの土地を持つこととなる。これは百姓にとっては永年の悲願であった。

「自分の土地をもてるっていうのは、本当にうれしくってさ」

と、往事を思い出し、恵美助は顔をほころばせる。小作人であった三浦家もこの恩恵を受けて、自らの耕作地を持つに至ったのである。ただし、相当の対価を払うことにはなった。

GHQ総司令官として日本に赴任してきたダグラス・マッカーサーをして、現代日本の父とみなす傾向が特に農村部において色濃いが、あるいはこういった事情があったからかも知れない。とにかく、百姓たち

にとつて、自分の土地を持てるということは、革命的なことであつた。

当時十七歳であつた恵美助は、すでに三浦家の労働力の中核になつていた。頭脳も明晰であつたので、通常ならば上級の学校へと進学しても一向におかしくはなかつたのだが、家庭の事情がそれを許さなかつた。自分よりも成績が劣る級友達が農業学校などに進学するのを傍目で見ていた彼は、よほど悔しかつたに違いない。しかし、翻つて考えてみれば、この悔しい思いこそが、それから先の恵美助を形成していったとも言える。彼は同い年くらいの友人達が学校でのんびり学んでいる間、遮二無二働いた。

その一方で、元來読書や勉強が好きだつた恵美助は、少ない自由時間を利用して、読者や勉強に勤しんだ。あるいは、学校に通つていた友人達よりも多くのことを、恵美助はこの時期学んでいたのかも知れない。学ぶとは、要は、意気込みの問題である。誰かから与えられて嫌々ながら就学時間を過ごすのと、自ら学びたいがために学ぶのとでは、吸収効率が圧倒的に違うものである。

この時期恵美助が読んでいた書物の中に、後の彼を語る上で実に興味深い物がある。
東大教授（農学・経済学）にして後の政治家、東畑精一が書いた『将来の農業・機械化農業』というものである。

アメリカやドイツに留学経験のある東畑は、将来日本の農業も機械化するということをいち早く予測、それに対する農政を提言した人である。

ちなみに東畑は第一次吉田茂内閣において農相まで務めた人物であり、農地改革においても主導的な役割を担っている。

「農業の機械化つて言つても、そんなことが果たして可能なものか」

一族や近所を総動員して田植え、稲刈りなどの農作業をしていた当時の恵美助にとって、この論文はあまりに斬新であった。が、読むにつれて、実現はあり得るのではないかと思うようになる。

恵美助は自分の周囲の状況と、この論文の内容を照らし合わせてみる。

機械化すれば、今までのように大勢で作業する非効率な農業形態は解体し、農村部に人手が余るようになる。三浦家もそうであるが、農村部では農繁期のことを思い、多くの子供をなす家が多い。子供たちを労働力として考えていたためである。

けれども、農業が機械化して、作業が効率化したらどうなるだろうか。

恵美助は自分の幼い妹たちや弟たちの顔を見る。あどけなく、鼻を垂らし、元気に田畑を駆け巡っていた妹弟たちであるが、そうなれば彼らの今後が一変するかも知れない。

本当にそういうことになれば、農業の形が革命的に変わるに違いない。

それだけではない、と恵美助は未来の日本に想いを馳せる。

こうした労働力が、日本の工業化を推し進めていくのかも知れない。

恵美助には若い頃からこう言った先見性と思考の柔軟性があった。つまり、その論文から次世代の農業の形態を、個人事業主方式だということを読み取った恵美助は、それを農業運営における理念として念頭にとどめることになる。これが後の三浦家の隆盛につながるのである。たしかに、戦後、しばらくして高度経済成長期に突入するのであるが、「時代の波」だけで水飲み百姓だった三浦家の隆盛を説明できるはずもなく、この恵美助の研究と先見性によって、多くの成功があったと言っている。

結局、東畑の推測通り、高度経済成長期に農家の機械化は促進し、機械化によって働き手がそれほど必

要なくなつた農家からは、大都市部へと大量に労働力が流出するのである。けれども、高度経済成長の中心であつた都会の方でも、労働力を必要としていたので、この時期の就職列車はあふれんばかりであつた。若い時分の恵美助の読書欲の対象というのは、広範囲に及んでいた。

世界が本格的な冷戦に突入する以前に、恵美助はマルクスの『資本論』やエンゲルスの『共産党宣言』を読んでいた。

敗戦によつて、何が本当かが信じられなくなり、自ら学ぼうと決意したことが、こういうところにあらわれている。

「たしかに魅力的な論旨だつた」

そう恵美助は言う。

皆が手を携え働き、平等に富を分け与え、しかも恐慌などといった、経済的崩壊もない。つまり、この共産主義が機能すれば、あの忌まわしい世界大戦を、もう人類は体験せず済むようになるのではないか。

そうは思つたものの、このまま共産主義に走らないところが恵美助である。

「これに傾倒する人の気持ちがよくわかつたよ」

と、恵美助はにやりと笑う。

「だがな、どうやっても人間の損得勘定を押さえ込むことなんてできないのさ。つまり、この理論は机上の空論として終わる」

このように恵美助は共産主義を学び、しかも懐疑的な意見を独自に抱いていたのである。これは特記すべきことではないだろうか。

朝早くから日が暮れるまで、終日田や畑を耕していた若い恵美助が、夜は裸電球の下で誰に頼まれたのでもなく、誰に強制されるでもなく、当時の最先端とも言うべき思想を次々と取り入れ、しかも独自の意見をもっていたというのは、普通ならばあり得る話ではない。彼が少しばかり裕福な家に生まれ、自由に学術研究に励むことができる境遇にあったならばと残念に思う次第である。

昭和22年、「えんきよの正巳ちゃん」とともに、恵美助は皇居に勤労奉仕に出かける。
ところで、「勤労奉仕」とはなんだろう。

ちようど宮内庁のホームページに、これを説明する記述があつたので、そのまま抜粋することにしよう。

「美しい皇居を守る力」

それが、皇居勤労奉仕です。

昭和20年5月に空襲で焼失した宮殿の焼け跡を整理する前に、同年12月に宮城県内の有志が勤労奉仕を申し出たことが始まりであり、それ以降、今日まで奉仕を希望する方々をお受けしています。

実に興味深い記述である。宮城県内の有志が始まりであり、それが今日まで続いているとある。

つまり、恵美助が参加した昭和22年宮城県有志による皇居勤労奉仕団は、そう言った意味において、今なお続く勤労奉仕の先駆けであり、本家本元だったということになる。

恵美助にとってそれは生まれて初めての上京であった。修学旅行にも似た、胸躍る旅だった。今も昔も、地方出身者にとって「東京」は、特別な響きを持っている。恵美助一八歳のときのことだった。

「正巳ちゃん、東京都はどんなところだべ」

「夢のような街だろうよ」

二人は期待を胸に、満員の蒸気機関車にのって東京を目指した。周りには同じく勤労奉仕に応募した多くの若者たちが乗っていた。彼らこそが、戦争を生き残り、戦後の日本を作り上げていくことになる人々である。

大日本帝国に生まれた恵美助にとっては、当時は首都という認識よりも帝都としての認識の方が強かった。しかも、天皇が暮らす皇居に奉仕に行くというのは、その時代の若者にとっては誇りある仕事だった。憧れの東京。

ところが、仙台、福島、郡山と地方都市の現状を目の当たりにして、恵美助と正巳の無邪気な期待はしぼんでいくこととなる。まだ戦後間もないこの時期、各都市は未だ復興とはほど遠い状況だったのである。仙台、福島、郡山という名がある野原が存在するだけだった。

そうだ、日本は戦争に負けたのだ。都市を徹底的に焼かれたのだ。

あるいは、恵美助が敗戦を本当に実感したのはこの時だったかも知れない。

旅の終着、首都東京もさらなる惨状だった。

「話には聞いてだけでもさ、焼け野原なんだもんや。まだまだ、ビルなんかもなくてさ」
そう、現代の恵美助は振り返る。

焼け野原の首都に降り立った恵美助。

しばし呆然と立ち尽くす中で、不思議と将来への希望が湧いてきた。

確かに東京は焼け野原となっていた。けれども、見渡せば、元気に生きる多くの人たちがいる。俺たちで国を建て直せばいいじゃないか。

そういった志が若い恵美助の胸に宿った。

それは恵美助ばかりが抱いた感情ではなかった。この時代の多くの若者たちが共通して抱いていた志だった。そういった多くの若者たちの志が、戦後の日本を創ったと言っている。

東京に行った恵美助だったが、当時三浦家には現金というものがほとんどなかった。信じられないことに、小遣いとして恵美助は米五升ばかり持たせられたという。

恵美助と正巳は、小遣いの米を手に、銀座や丸の内、有楽町の街を歩いた。まだまだ食料が足りない時代だったので、米は金と同じであった。米でたいていの物は買えたのである。勤労奉仕を終えて、当時もライندگانで有名だった宝塚の劇までも観たというから驚きである。

東京を体験してからというもの、志を新たにしたい恵美助は更に仕事に没頭するようになった。

自分たちが日本を創るのだ。

そう言った炎ともいべき志を胸に確かに宿し、帰ってきたのである。

終戦後、世の中が目に見えてよくなってきていたとは言え、三浦家の隆盛はまだ先の話である。

一家の主である恵美助の父、兵助が体を痛めて満足に働けなくなり、まだ年若い恵美助が事実上の一家

の大黒柱となる。しかも、当時親類が重病を患い、本家である三浦家はそれを助けるために、せつかく手に入れた田畑や屋敷を抵当に入れてその医療費に充てざるをえない状況となった。

つまり、恵美助が実質上三浦家の総領となった時点においては、完全にマイナスからのスタートだったのである。

「さて、どうするべきか」

迷っている暇すらなかった。何とかしなければ、一族は路頭に迷うことになる。

答えは一つしかない。

「文字通り、身を粉にして働くのみである」

学問に対する情熱的な想いと悔しき。

一族の総領としての責任感。

そして、将来に対する希望と確信。

当時の若い恵美助を支えていたのは、そう言った透徹たる想いだった。彼はまさに身を粉にして、家族のため、一族のため、また自らの将来のためにほとんど休みなく働き通した。

そのときのことを振り返って恵美助は言う。

「朝早くから起きて野菜を集め、岩手県の市場に軽トラックで運んでいき、またすぐに戻って畑仕事をこなし、野菜を集め、最盛期では一日二回市場に野菜を運んだんだけど、なんでかや、こわぐはなかったんだ」

「こわい」とは標準語で「疲れる」という意味。

執念とも言うべき想いを持って働いていた当時の恵美助にとっては、働くこと自体が生き甲斐になっており、また面白かった。それだから、疲れを感じる以上に、精神的な充足を感じていたのだ。

家族のために身を粉にして働き、充足感を得て、疲れさえも感じない。人として生きていく上で、これ以上の幸せはないのかも知れない。

確かに、精神的には疲れなかった。しかし、恵美助の強靱な精神に物理的な意味において体がついて行かなかった。長女の幾子に聞いたところによると、恵美助は家族に隠れ、自分でビタミン剤や栄養剤を注射しながら働いていたのだという。しかも、それでも本を読むことをやめなかった。

その姿を思い浮かべるときに、なぜだろうか、目頭が熱くなる。

歴史上に名を残す人物達の英雄伝などは、後世に当然のように残される。しかし、英雄とは教科書に載るような人ばかりではない。我々の直そばにも英雄とはいるものなのだ。彼らは自らおごって話すこともないゆえに、単に語られずに終わってしまっただけなのだ。いわゆる「サイレンス・ヒーロー」が、世の中に無数にいたものと推測される。恵美助もまさにその一人だと筆者は思うのだ。

こういう人たちの言葉をこそ、後世は聞くべきであり、こういう人たちの生き様をこそ、後世は胸にとどめておくべきである。

三浦家のために、懸命に働く恵美助の元に当然のように縁談が持ち上がる。恵美助、二十三歳の時のことである。

自分から女性に執着するのではなく、頑張っている後ろ姿を誰かが認めて、紹介したくなる。これは男

女が出会う上での理想なのかも知れない。お見合いと一口で言っても、そう言った積極的な側面でのお見合いというものもある。

とにかく、同じ地区の人が恵美助の頑張りを認めて、自らの実家に良縁を探し当ててきたのである。妻の智恵子とはそうやって出会った。

中田町石森は石森章太郎の故郷として有名である。そこからそう遠くない場所に智恵子の生家がある。智恵子は当時としては珍しい女学校出の頭のよい女性であった。そして、よく働く人であった。

恵美助といえば働き者というだけでなく、実を言うとかかなり容貌がいい男であった。

これはオフレコで、と言われていたことだが、あえて書かせて頂くとする。

「実はな、昔から女の子からもてたのっさ」

若いときからの写真を並べてみると、そう恵美助が言うのも十分にうなずけるのである。同じ写真に他に二十人ほど写っていたとしても、際だつていい男なのである。また、身だしなみにも相当に気を遣っていたとも思われる。

とにかく、この縁談はどちらかしても良縁だったのだ。

お見合いの席は石森であった。

お互いの親立ち会いのもと、仲人からそれぞれ紹介を受けて、後は若い二人で、という流れは今も昔も変わらないところだ。

二人は促されるままに、外を歩き、お互い緊張しながらも、二三、言葉を交わしたらしい。その様子がよかったと後に智恵子は述懐している。また、長女の幾子によると、智恵子も相当にもてる人だったとい

う。

この庭での、この瞬間に、恵美助と智恵子から始まる系譜の運命が決せられたと言ってもいい。

「私が来てから、三浦家のしんしよがだんだんよくなってきたのよ」

「しんしよ」とは一般には財産などのことで、ここでは「家計」と訳してしまってもいいかも知れない。

そう冗談交じりに智恵子が言うとおり、智恵子という伴侶を得てからの恵美助の周りには実にいい風が吹き始める。

やはり、男子とは強力にサポートしてくれる良妻を得ることによって、後顧の憂いなく全力で戦えるようになるものらしい。

それまで、働けど働けど我が暮らし楽にならずの状況であったのが、目に見えて好転してきた。いい時代になってきた、ということも確かにあったろう。だが、やはりそれだけでは説明できないのである。賢く、働きの智恵子がいたからこそ、という局面が数多くあった。

毎日、休む暇も惜しんで働き通した恵美助と智恵子。しかも彼らはただ闇雲に働いていただけではなかった。頭を使ったのである。

「なんで北の市場に野菜をわざわざトラックで運んだがって言うとな」

と、恵美助は言う。確かに不思議である。宮城にも大きな市場はあったはずなのだ。

「南の方ではすでに出でで、まだ北の方では出でない野菜つてのが結構あってさ、それが高く売れたのつ」
「は」

つまり、南と北の温度差を利用して、より高い相場の北へと運んでいったのだという。これは百姓と言

うよりは、むしろ交易する商人の感覚である。恵美助にはこう言った商才が間違いないくあった。

時には南の宮城では普通に採れているのに、北で全くできない作物があり、二三次運んだだけで、前の年の一年間の収入にも匹敵するほどに稼いだときもあった。

「市場に何回か行って、まとめてお金を受け取るわけっさ。その時なんて封筒を開けてびっくりしたっちゃや」

と、笑う恵美助である。

生来、商人的な感覚を持つ恵美助にとって、こうやって稼いでいくことが実に楽しかった。楽しかったからこそ、疲れ知らずで頑張れたのである。

努力が実と形になり始めた時期である。

実に重かった幸福の歯車が、ようやくなめらかに回り始めた。

親類の医療費のために田畑などにつけられた抵当権をはずした、つまり実質的に田畑を取り戻したのが、恵美助がまだ二十五、六のところだったというから、現代では信じられないほどの若さである。呪縛のようなマイナスを取り払い、後は働けばプラスへと積み上げられるのみ。この時期、恵美助は今まで感じたことのない充足感を覚えていた。

しかも、昭和29年には長女幾子が誕生し、親としての喜びを知るようになる。これによって、恵美助は正真正銘の一人前の男となった。

さて、このあたりで恵美助が隆盛し始めた頃と、その時代を照らし合わせてみよう。

恵美助が智恵子と結婚した前年の1951年（昭和26年）には、内閣総理大臣吉田茂がサンフランシスコにおいて講和条約に調印し、日本が独立に向けて歩き始めた時期である。翌年にはGHQが廃止され、戦後日本はようやく補助輪を外された状況となる。

朝鮮戦争特需で景気もよくなっており、1953年にはNHKがテレビ放送を開始し、日本は豊かになりつつあった。

つまり、恵美助の隆盛は、日本の経済成長の縮図でもあったわけだ。

長女の幾子が生まれた昭和29年には力道山がシャープ兄弟と戦い、人々は白黒テレビの前に集まって空手チョップに驚喜した。そして昭和30年からは神武景気が始まる。

恵美助のみならず、日本中はやる気と希望に満ちていた。おそらく、恵美助のように家族のために日本の復興のためにと全身全霊で働いていた人々が日本中、至る所にいたのだろう。

こうしたパワーを我々は見習わなくてはならないのではないだろうか。彼らが作り上げた社会で、彼らが作り上げた豊かさを消費するだけの生き方で、本当によいのだろうか。為すべきこと、あるいは為さなければならぬことが、それぞれの人にあるはずなのだ。

第三章 隆盛期

朝はまだ薄暗いうちに起きて、野菜を用意し、オートバイ、あるいは軽トラックで国道四号線を北上する。目指すは岩手県水沢市（現・奥州市）の市場である。宮城県北の若柳町から水沢までは50キロほどの距離である。往復で、ざっと100キロ。

その当時のオートバイ、軽トラックであり、野菜も満載していたこともあって、そんなにスピードも出さず、この運搬だけでも相当に骨の折れる仕事であった。

水沢市には当時から水沢競馬場があった。傍らを通る際に、人の喝采や馬が大地を蹴る怒濤の如き音が聞こえる時がある。

あるとき、恵美助は車を停めて遠くから競馬場の様子を窺っていた。

腕を組み何やら考えていたかと思うと、しばらくして、よしと手を叩いた。

「これはいけるかも知れない」

そう思う恵美助の念頭にあったのは、間違っても競馬のことではない。

競走馬が食うニンジンである。

恵美助に商才があったこと、そして先見性があったことは前にも触れた。これが顕著になってくるのが、これから話す時代である。

昭和31年2月3日には次女の篤子が生まれ、その4年後、昭和34年11月17日には三女の静恵が生まれている。これをもってそれぞれ個性的な特長を持つ、三浦家三姉妹の全員登場となる。

また、恵美助の兄弟姉妹達もこの時期の前後に、それぞれ相手を得て、三浦家を出ている。

恵美助の姉、きねこは早い時期に東京に嫁ぎ、悦子は畑岡に、そして明美は同じ若柳町の上町へと嫁いでいる。

また、佐藤内科に事務職として勤めていた弟の兵二は、別に一家を構え、末の弟の三郎は神奈川県警の採用試験に受かり、横浜へと巣立つ。

彼ら兄弟姉妹達は恵美助を長兄としてばかりではなく、父親として見ていた風がある。早くから一家の大黒柱的に労働力の中心となっていたので、恵美助は自然とそういう役割を担うようになっていたのだ。

特に三郎とは十四も離れていたために、三郎が結婚したときなどは、兵助に代わって実の父親のような役割を果たした。

さて、この時代における農業とはどういうものであったのだろうか。

江戸時代以前の封建時代から、農を営む者はおしなべて百姓であった。米や野菜を懸命に作り、お上に年貢を上納する。時代によって、そのお上が代わっただけである。

封建時代にはそれは武士であり、明治以降はそれが地主になり、そして農地改革以降はそれが政府になりまた農協になったに過ぎない。「百姓」としての感覚が抜けない多くの人にとって、革命的だった農地改革も土地が自分の物になって良かったくらいの思いしかもたなかったのである。

ところが、農地改革以後、農の仕事は「農業」として捉えられる人が登場し始めた。まさに本編の主人公、恵美助がそうである。

岩手と宮城での野菜相場の違いなどに早くから目をつけていた恵美助は、農業を今でいうところの個人事業主として捉えていた。つまり、農業において「三浦商店」を構えていたようなものである。彼は事業

を拡大するために様々な戦略を展開する。それこそが、恵美助に先見性と商才があったと言う所以である。

40アールの畑いっぱいには野菜を植えるという行為は、会社株式を買う行為と似通うところがある。限りある資金でどの銘柄の株を買えば結果的に儲けが出るかという考え方と、限りある耕作地でどの野菜を植えれば効果的に儲けられるかという考え方には相通じるものがある。

水沢から戻った恵美助の念頭には、すでに今後の畑の栽培計画ができあがっていた。

栽培計画と言っても実にシンプルである。

40アールの畑の大部分にニンジンを植えることにしたのだ。水沢競馬場が栄える様子を見て、そう判断したのである。

岩手県は宮城より冷涼でしかも「やませ」という季節風の影響を受けやすい。ゆえに農作物が不作になる確率が高い。つまり、いつ不作になって農作物不足に陥ってもおかしくはなく、準備をしておけば必ず馬のえさになるニンジンが不足して、南の宮城から運べば大きな利を得ることができると、恵美助は読んでいたのだ。それが現実のものとなり、恵美助は大きな利益を上げるのである。

ちなみに、恵美助は競馬やパチンコなどのギャンブルは一切やらない。ギャンブルに興じている暇がなかったと言えはそれまでであるが、恵美助がギャンブルに興味を持たなかったのは、あたかも自分の人生全てをルーレット台にのせて日々勝負を張っているような生き方をしていたので、馬やパチンコ玉にわずかな金銭を託すような類の賭け事がつまらなかつたからだ。

そういった野菜相場を見極めるやり方で、農業個人授業主「三浦商店」は繁盛していった。それは恵美助の才能とともに、優秀有能な働き手が三浦家にいたからである。

妻の智恵子は恵美助をよくサポートし、また自らも有能な働き手であった。

野菜を満載にしたリヤカーを若柳の町へと毎日のように「売り方」に行ったのであるが、智恵子が持つて行く野菜は、よく売れた。

「智恵子さんが持つてくる野菜はうまい」

スーパーなどに野菜が安売りで多く溢れる時代になってからも、そう言つて遠くから車で来る者も度々あつたほどである。つまり、「智恵子さんの野菜」はある種のブランドとして確立していたものと思われる。

朝、リヤカーに野菜を満載にして町に行つても、昼にはすべて売り切れて、最後には、ごめんなさい、売り切れてしまったのだもんや、また持つてくるからね、と謝るような毎日であつた。

智恵子は当時珍しい女学校出の才女であつた。その彼女にも商売哲学のようなものがあつた。損して得取れ。

それが彼女が野菜売りに関して常に口にしていたことである。その言葉の通りに、野菜を買つてくれる人に対して、彼女は傍目で見ていて大丈夫なのだろうかと思うほどに、大盤振る舞いのサービスをした。だが、それが固定客の獲得につながつた。一度食べてもらえば「智恵子さんの野菜」はブランドとして確立するほどにうまいので、ただでさえリピーターが後を絶たないのに、サービスまでいいとなれば更にそれに拍車がかかるといふもの。昼にリヤカーが空っぽになり、代わりに肉や日用品などの買い物を満載にできた理由はそんなところにあるのだろうか。

また、恵美助の母クマもよく働く人だつた。時間さえあれば、頬被りをし、もんぺをはいて、鎌を手

畑の草取りを丹念にしていたので、親指が鎌の柄によって変形してしまふほどだった。

更に幾子、篤子、静恵の三姉妹もよく農作業を手伝った。黙々と懸命に働く両親の後ろ姿を見ていた彼女たちは、自然に手伝わなければと思うようになったのである。

このように、この当時三浦家では、知らない間に明確かつ効率的な役割分担ができていた。恵美助が主として方針を定め、舵取りをし、家族一丸となって農作物を作り、恵美助が相場を見極めながら、高い値をつける市場に野菜を出す一方で、智恵子がリヤカーを引いて、町での販売を担当する。この一連の流れがあったからこそ、財政的にも余裕が生じるようになった。

名目上の主人である恵美助の父、兵助が体が悪く、ろくに働けなかったのに三浦家がこの時期隆盛した理由は、恵美助の才能という面も大きく寄与していたが、それを支える三浦家の女性たちの奮闘があったからこそなのだ。

そして、恵美助は彼女たちを奮起させるカリスマ性を持ち合わせていた。懸命に家族のために働く後ろ姿は、自然と神々しいオーラをまとうものである。

彼女たちの述懐によると、当時の恵美助は鬼のように怖く、とても気軽に話せるような存在ではなかったという。今で言うところの家族サービスなどしたことがなく、恵美助は四六時中仕事のことと頭がいっぱいであった。

確かに、彼女たちにしてみれば、優しい父親ではなかったかも知れない。けれども、彼女たちは皆、恵美助が自分たちのために働いているのだということを知っていた。知っていたからこそ、彼女たちは手伝ったのである。

すなわち、当時娘たちは畏怖の念を持って、父親の後ろ姿を見つめていたのだ。

第四章
立志期

「あのさ、誠ちゃん、おれ今度豚で勝負をかけようと思うんだ」

恵美助はある日、東隣の相馬家に行つてこう言った。相馬誠一は恵美助にとって友人であると同時にライバル的な存在だった。

誠一は自ら鉄工場を興し、今まさに時代の波に乗ろうと模索していたのである。その当時は自宅の長屋で細々とやっていた程度であった。

一方の恵美助は、強力なリーダーシップを発揮し、仕事師の集団「三浦商店」を率い、見事に隆盛していた。

それを証明するかのように、恵美助は昭和42年に新居を建築する。無論、借金をしての建築ではあるが、それを返せる目処も立っていた。

「恵美ちゃん、豚やるって言つても、どこでやるのや？」

それよ、と恵美助は誠一の顔を指して言う。

「誠ちゃんに養豚場を建ててもらおうと思つてな」

「養豚場だつて」

と、きよとんとしてしまふ誠一であった。それは無理もないことだった。誠一ばかりでなく当時の多くの人はまだ養豚場なるものを見たことがなかったのだ。

「人間の家と違つてな、養豚場は豚が暴れたりするから、丈夫に作らなければならねえのつき。木の柱だけでなく」

「鉄の柱や鉄の檻がほしいってことだな」

と、元々聡い誠一は恵美助が全てを言う前に言う。

「そうよ、と恵美助はうなづく。」

「よし、わかった、俺に任せろ。恵美ちゃんの養豚場に使う鉄骨の全てを俺が用意してやる！」

こうして恵美助は、翌昭和43年に大きな勝負に出た。借金をして結構な規模の養豚場を建設し、養豚業に打って出たのである。

恵美助が養豚業に進出するきっかけは、弟の兵二が勤めていた、佐藤内科から、数頭の豚を譲られたことだった。

生来「研究熱心」な恵美助は、この家畜について、独自に研究を始める。養豚のノウハウについて調べるのはもちろんのこと、養豚業の可能性、またはその市場形成、相場についても調べ上げ「いける」と判断して、誠一に養豚場建設を依頼したのである。

養豚場を建設して大規模に養豚業を営むということは同じ地区でも先駆的な試みであり、恵美助の成功を見て、まもなく同じ地区のほとんどの農家がこれを模倣することになる。

この時期の恵美助がもたらした「いい風」について、興味深い逸話が残されている。

三浦家の養豚場建設を請け負った、隣の家、相馬鉄工は、起業して間もないころのことであり、実はその養豚場建設が初めての大きな仕事であった。この養豚場建設が成功し、また恵美助の養豚業がうまくいき、近隣がこれを模倣したために、相馬鉄工にはうちにも養豚場をつくってくれ、との依頼が殺到し、これによって今の相馬鉄工へと至る、財務基盤が確立されたのである。

また同様に三浦家の新居建築を請け負った大工にとっても、これが初めての大仕事であり、この仕事を皮切りとして、何人もの従業員を抱える大工の棟梁へと出世していくことになる。

一人のひたむきな奮闘が、周囲に「いい風」をもたらし、それがやがて旋風となるということが、いつの時代もあるものである。

この時期、恵美助は、間違いなく、一つの旋風の中心にいたのである。

農業によって事業展開するということは本当にできるのだろうか、と首を傾げる方があるかも知れない。確かに、同じことをしても、恵美助のようにうまくいくことはないだろう。時代がまるで違うのである。今でこそ日本では米食の比率が低下し、野菜や豚肉も輸入物に押されているが、当時の状況はまるで別であった。

恵美助が農業において隆盛を極めていた頃はすべての相場が高騰期を迎えていた。

米において宮城はブランド種ササニシキを有しており、これがいい時で一俵二万三千円で出荷できた。その価格は、今の米相場の実に倍である。

また野菜も作れば作るほど高値で売れた時代であり、これによる収益も大きかった。

さらに養豚に関しては、隆盛期には一種のバブルの趣きすらあった。豚で儲かってベンツに乗っていた農家もあるというくらいであった。具体的には繁殖させ、養育した肉用の豚が一頭五万円ほどで売れた時期が確かにあったのである。一度の種付けによって、豚は十匹前後の子を産み、半年に一度妊娠するとなれば、母親豚が五頭もいれば莫大な収入になったことは想像に難くない。

確かに、時代はよかった。けれども、その時代の流れを正確に見極める能力があったからこそ、恵美助は成功したのだ。

今恵美助と同じことをしたとしても財を築くことは難しいだろう。だが、この恵美助の先見性、時代の波を読む力については、現代における我々も大いに学ぶことができる。要するに、その当時ではたまたま恵美助は農業に目をつけて成功したが、もし今の時代に二十代、三十代の恵美助がいれば、この時代にあつた何かを見いだして成功しただろうということだ。

恵美助の先見性については、この農業に関してが全てではない。いわば、今までの話は「序の口」である。恵美助が恵美助たる所以は、これから話す時代にあるのだ。

男子志をもって立つ。

これより、恵美助は政治家を志すのである。

『この度、町議会議員に立候補致しました、ミウラ、エミスケ、ミウラ、エミスケでございます！ ミウラ、エミスケ、ミウラ、エミスケが皆様に挨拶に参りました。ありがとうございます、応援、ありがとうございます！』

宮城県栗原郡若柳町は、金成耕土の東端にあり、迫川が中心を貫く。西にそびえる栗駒山は姿美しく、この町は人の故郷として完全無欠とさえ言え、普段は実に静かである。

ところが、四年に一度の選挙の時期だけは町中が騒がしくなる。

選挙カーに取り付けられた拡声器から出る声が、町中に響き渡る。

そう、この物語の主人公、恵美助が町政へと打って出たのである。

研究熱心で、読書好きな恵美助であったが、残念ながら家庭の事情で上級の学校には進めなかったことは前にも述べた。けれども、その悔しさをバネとして、恵美助は努力し、マイナスからスタートした農業において成功を収める。その頃になると、ひたむきに働き、家の身上を見事に立て直した恵美助に対して、同じ地区の住民達は一目置くようになっていた。

同時にある程度の経済的な余裕を手に入れた恵美助は、視線を上げて、より遠くを見渡せるようになっていた。

もう、食うに困るということはなくなった。

そうした手応えを確実に感じたとき、恵美助は勤労奉仕の際に東京で胸に抱いた志を色鮮やかに思い出すのである。

俺たちが新しい国を創るのだ。

国というのは、個々の地域、個々の家族の集まりである。その個々が幸せになれば、新しい国はよりよいものとなる。

「今度は地域の人のために働こう」

そう決意し、遂に恵美助は同じ地区の常会の賛同を得て、若柳町町議会議員へと立候補するのである。

昭和50年、恵美助45歳の時のことである。

麦わら帽子とランニングシャツ、首手ぬぐいと長靴で田や畑にいた恵美助が、背広を着込み、髪を七三

にきれいに分け、白手袋をつけ、マイクを握り、街頭に立つ。

恵美助にとつて全く新しい世界への挑戦となったが、これこそが本来の姿であったかと皆が瞠目するほどに、容貌がいい恵美助にはそのスタイルが良く似合った。

新築した三浦家の屋敷が「三浦恵美助選挙事務所」となり、襖や戸が取り払われて、一連なりの座敷となり、長テーブルが並べられた。そこに連日連夜、支援者が駆けつけ、また台所でも近所の女性達が応援に来て、三浦家は開闢以来の賑わいを見せることとなる。

今でこそ、公職選挙法が厳しくなり、様々な規制がかけられるようになったが、当時は割合緩やかで、酒などもふんだんに振る舞われていた。ゆえに、当時の選挙は一種のお祭りのような観があった。

普段、農作業に明け暮れる者たちが集まり、夜は酒を飲み交わし、町政などを語る。そして、昼は手分けして票集めに奔走し、おれは何票集めた、俺は何票だと自らの力を誇示する。確かに恵美助の家族にとつては大変なことだったが、参加する人の多くが実は楽しんでいて。

同じ地区の推薦によって立候補した恵美助には当然にその地区の応援があったが、それ以外にも恵美助には強みがあった。自分が父親のようにして世話をしてきた兄弟姉妹、親類達が町の至る所に散らばっていた。

弟の兵二は町の佐藤内科にあつて事務長として確固たる地位を築いていた時期であり、妹の悦子は畑岡に、また妹の明美は上町に嫁いでいた。さらには従弟の謙も畑岡にあつたし、母クマの実家が有賀にあつた。

今まで恵美助に世話になってきた人々である。ついに恵美助に恩返しができるときがきたと、一族は全

力で恵美助を助けた。

恵美助にとつて、更に予想外の応援があった。

若柳町とは戦後に、若柳村、有賀村、畑岡村、大岡村が統合してできた町である。それで言えば恵美助は有賀村出身者であり、若い頃には有賀村の青年団に加入しており、その団長を勤めていた時期もあった。その関係で、昔の舎弟たちが選挙運動に協力してくれたのである。

三浦恵美助選挙事務所においても、さらに選挙参謀や会計などの役員の選挙があり、そこでの争いにも悲喜交々があった。役員選挙に敗れ、ふてくされる人を、三浦家の女性陣がフォローする姿も見られた。投票日前夜になると、三浦恵美助選挙事務所のボルテージは最高潮となった。各役員が応援演説に立ち、また県議会議員の佐藤勇（後の栗原市初代市長）が応援に駆けつけ熱弁をふるった。

だが、台所を担当していた女性陣を含める多くの人たちにもっとも感銘を与えたのは、彼らではなかった。

「おらさも一言、一言だけ言わせてもらいん」

応援演説、恵美助自身の決意表明なども終わり、後はお開きという段階で、座敷の末席から声があがった。

そこにいる多くの人の目が、後方へ集中する。三浦家の西隣に住む、佐藤きよみであった。せつかくいい感じでお開きにできたのに、ばあさんが何をでしゃばるんだという空気があった。

それでも、きよみは構わずに大きな声で言った。

「恵美ちゃんは子供の頃、弟の兵ちゃん（兵二）と一緒に、リヤカーでうちのお父さんごと、いつつも有

賀村の役場まで乗せて行ってね、ホント、助かったんだ」

まだ若柳村として統合される前、きよみの父は有賀村の村長をしていた。体が悪い時期があり、子供のころの恵美助と兵二がいつもその人をリヤカーに乗せて役場まで連れて行っていたのだと言う。

誰も知らない話だった。

静かにうつむくように微笑む恵美助ときよみに交互に視線が集まった。

「恵美ちゃんは本当に優しい人です。昔も今も変わらず、優しい人です。皆さん、どうか恵美ちゃんを勝たせてやってください。本当にお願います」

深々と頭を下げるきよみの頭上は、一瞬の静寂の後、座が割れんばかりの拍手喝采となった。男たちはかりでなく、台所から顔を出して聞いていた、前掛け姿の女性陣からも拍手と歓声が沸き起こっていた。

初めて立候補した恵美助であったが、そういった様々な要因がプラスに働き、二十六人中四位の好成績で当選を果たす。役職についた経験もなく、政治に関して実績もない新人候補がこのような結果を出すことは、無論、異例のことであった。

恵美助には衰退していた三浦家を立て直したという自負があった。また自らの能力に対して自信を持っていた。町政の場においても、必ず自らの能力が必要とさせる時期が来ると静かなる確信を胸に抱いていたのである。

町政においても、恵美助は着実に仕事をこなし、信頼を得ていった。また、田舎らしからぬ風貌と「えみすけ」という「変わったなんつもんでねえ」と自ら評する名前によって、すぐに町民に知られることに

なった。なにせ、議会だよりにせよ、『わかやなぎ』という町の広報誌にせよ、二十六人いる議員や町長が並んだ写真を見ても、実に目を引くのである。いつしか「大袋の恵美助さん」と言えば誰もが知る存在となった。

三浦家の総領という立場から考えても、この恵美助の議員当選というのは大きな意味があった。それというのも、恵美助が議員になって以降、日本の農業は痛々しいほどに下降線を辿ることとなるからである。

農業衰退の第一の原因が、安価な輸入品の流入であった。それまで規制されていた農作物や肉などの市場を、日本政府は貿易摩擦によって解放せざるを得なくなったのである。

次には国民の生活スタイルの変化があった。それまでは農協が中心となって、「生産費所得補償方式」という制度の元、生産者の方がこれだけ費用がかかるから、これだけの価格で卸しますと宣言できていたのだが、西洋の生活スタイルが浸透してきて、日本人は肝心の米をあまり食わなくなってきた。そうとなれば、当然米が余り、米価が下がる。それでも足りずに「減反」「減反」とばかばかしくなるほどに、農家は生産調整を迫られることとなった。

戦後まもなくは農業の機械化について勉強していた「研究熱心」の恵美助は、この時期も輸入や生活スタイルの変化について、独自に研究し、それらについて個人としての明確な見解を有していた。

若い時分に打ち立てた「志」と共に、三浦家を守る事を考えた上で、恵美助はスーツを颯爽と着込む仕事へと進出したのである。

更に三浦家に吉事が重なった。昭和51年に、長女幾子が田尻町から婿をもらうことになったのである。

これが現在の三浦家の当主、俊伸である。

見合い結婚だったわけであるが、三浦家は壮健な若い男の働き手を得ることとなる。恵美助以外の労働力がほとんど女性だった三浦家にとつてそれは待ちに待った出来事だった。

都会でやんちゃしてきて、実家の田尻に戻ってきていた俊伸であるが、この男は仕事が相当にできた。三浦家に似つかわしい働き者だったのである。

恵美助はこの若い俊伸に、野菜の市場への出荷について教え、また養豚業について教えた。つまり、早い時期から農業個人事業主「三浦商店」の業務は俊伸へと継承されていたのである。恵美助はこの継承を戦略的に行つた。早い時期に家の仕事の大部分は俊伸に任せ、自分は町政の場において勢力を拡大しようと考えたのである。

そういった意味においても、婿の俊伸は格好の継承者であった。もし三浦家に男子がいたとしたら、果たしてこううまくいったらどうか。いつの時代もどの世も、革新的な一代目の次は怠惰な二代目と相場が決まっている。自分が苦労したからと息子には楽をさせよう、学ばせようと考え、都会に遊学に行かせ、ついに実家には戻らないというのが落ちだったように思える。つまり、恵美助に男子があつたとしても、俊伸以上に着実に継承できなかつただろう。

かくして、有能な継承者を得た恵美助は、町政の場で着実にキャリアを重ねていくこととなる。

第五章
政治家、
三浦恵美助

さて、恵美助はどういった政治家だったのだろうか。

政治家にも様々なタイプがある。

田中角栄のように土建屋の親分的に、ごりごりと政策を実現するようなタイプ。

吉田茂のように先見性を持って自らの信念に生きるタイプ。

小沢一郎のように、自らの政治理念を実現するためには手段を選ばないようなタイプ。

福田ジュニアのように局面調整に長けたタイプ。

小泉純一郎のように、国民を扇動して政策を実現してしまうタイプ。

三浦恵美助という政治家はこれらのタイプのどれにも当てはまらない。完全に実務の人であった。そういった意味で、全面に自らを押し出す政治家と言うよりも、むしろ町政を背面から支配する官僚に近いタイプだったのかも知れない。求められれば、舎弟分に教示したりするが、自ら派閥を形成して打って出ようという気はなかった。それよりも、自分に与えられた任務を着実に遂行することに心血を注いでいた。そして、何より地元地区大袋の人のために働くことを思っていたのである。

恵美助さんに任せれば間違いない。

周囲からはそんな風にして徐々に信頼を勝ち得ていった。

もし、恵美助にもっと政治的な野心があり、また人を誑かせるほどの軽やかな舌があつたならばと考える。おそらく、議長はもとより、町長という可能性すらあつたのではないかと思う。そう思えるほどに、町政の実務においては突出した実績があつた。

昭和50年11月に初めて当選してから、恵美助は連続四期十六年間に、若柳町議会議員を務めた。その間、一度も選挙に負けることはなかった。そして、引退後は若柳町礼遇者、平成の大合併後は栗原市の礼遇者として、今なお地元の名士である。

十六年の任期に、恵美助は数知れない業績を残した。

栗原郡衛生センターについては、当初から建設委員長として関わり、二十三億八千万円にも及ぶ公共事業を取り仕切った。

また若柳小学校の建設委員として、小学校の建設にも関わった。さらには板倉堰をはじめとする水路の補修や農道の舗装事業を推進した。

町長を説き伏せて、大袋加工センターの建設に尽力したのも恵美助であった。この時は町長に様々な名目で追加三〇〇万円を出納させ、また大袋地区一軒一軒にあえてわずかな金額を負担させて、みんな建てたのだという共有意識を持たせるようにした。

数々の実績の中で、地元の大袋地区に対する貢献として特記すべきは夏川機関場の機関場建設であろう。

宮城県と岩手県の県境を流れる夏川流域の水田は、実に水害に遭いやすい地域であった。ひどいときには五年間で三度水害にあったというから、まともに米が穫れていた年の方が少なかったと言える。しかも、当時はまだ水害に強い品種があったわけではなく、農家は貧しかったゆえに、その被害は甚大であった。

恵美助が議員になった当時も、夏川には機関場があったのだが、これがうまく機能していなかった。そこで、第二機関場の建設が必要となり、恵美助がこれに関わったのである。

「何とかして地元の人の窮地を救わねばなるまい」

恵美助はその一心で、第二機場設立のために奔走した。

今も昔も変わらないことだが、行政というものは、特に官僚というものは反応が遅かった。町の案件はまず町に上げて、郡に上げて、県に上げて、農林省にあげて、最後に予算をつける大蔵省に上げるといふ方もなく面倒な手続きが必要であった。

これを素直にこなしているのは、第二機場はいつできるかわからない。行政がもたもたしている間にまた水害で稲がやられるかもわからない。

そうした切迫感が恵美助にはあった。

今の時代、いわゆる「はこもの」の作りすぎで国と地方の借金がかさみ、公共事業が目の敵にされている嫌いがあるが、必要な公共事業というものも世の中にはある。まさにこの第二機場の建設などは喫緊に必要なことであり、こういったことになれば、税金は投入すべきなのだ。

この時、困惑していた恵美助に力強い味方が現れる。これより盟友となり、多くの苦楽をともにすることとなる、町長の鈴木吉右衛門である。

吉右衛門さんの車は無人運転と言われたほどに、背が低かったが、恰幅がよく、精力に溢れた人であった。ちょうど姿のよい恵美助と並ぶとその凸凹ぶりが際だったが、この二人は馬が合った。

この時も、大袋集落の惨状を知った吉右衛門は何とかしようと請け負ったのである。

ちなみに、恵美助の生家がある「大袋」の地名は、地形が袋状になっており、よく夏川が氾濫して水没したことに由来している。最近まで、長屋の屋根に船がくくりつけてある家があったのは、その名残である。そういったわけで、大袋地区の住民たちにとって、水害の悩みがなくなることが、長年の悲願だった

のである。

「だがな、通常の手続きをこなしてたんではこれは無理だな」

吉右衛門は腕組みして考える。

「下手をすれば、五年、いや十年かかるかも知れません。何とかありませんか」

恵美助にしてみれば、一日でも早く住民を救いたい思いであった。

わかった、と手をたたいた吉右衛門の表情には決意と覚悟があった。

「大蔵省に直談判に行くべ」

「大蔵省……。まさか東京に行くんですか」

恵美助がそう絶句するのも、無理はない。郡や県、農林省を飛び越えて、大蔵省に陳情に行くなどということは、本来あり得ることではない。巨大会社において、係長が取締役に直談判にいくようなものだ。

「ああ、やるしかねえべ。恵美ちゃん、東京さ行くべ」

もう、だめで元々であった。

「わかりました。行きましよう」

一蓮托生の思いで、恵美助は町長の吉右衛門と共に東京に行くことを決意するのである。

町長と議員の恵美助、それと若柳町の担当課長がそれに随伴した。

昭和五十年代、この当時の東京は恵美助が初めて上京した、あの皇居勤労奉仕の時とは別世界である。

オリンピックや高度経済成長期を経た東京は、恐ろしいほどに巨大な都市へと成長していた。見渡す限りの巨大ビルの街である。

日本は焼け野原から生まれ変わった。

その姿を見た恵美助の感慨もひとしおだった。

霞ヶ関の大蔵省の庁舎に入った吉右衛門一行は、担当の官僚に直談判する。

如何にその公共事業が必要か、その流域が如何なる被害を受けているかを、無我夢中で切々と訴えた。

緊張と疲労から、帰りに大蔵省の玄関先で吉右衛門が倒れるほどであった。

彼らの住民を思う気持ちが伝わったためだろうか、どういうわけか、この直談判が成功し、当時十億を優に超えると言われた予算が満額ついたのである。

一番驚いたのは、東京に直談判に行った当の恵美助たちである。駄目で元々のつもりで行ったというのに、予算がついた。

彼らは手を取り合って喜んだ。

「これで、水害がなくなる」

しかし、喜ぶのもつかの間の話であった。事の次第を聞いた県が、直接大蔵省に行くとは何事か、と激怒したのである。

考えてみれば、当然だろう。会社で言えば、ないがしろにされた部長や課長がおもしろいはずがない。

覚悟を決めて、恵美助と吉右衛門たちは県庁を訪れることとなる。

「この制度がどういう仕組みになっているか、おわかりか」

県庁では農林課長が、恵美助に対してそう切り出したのである。もともと風格がいい恵美助を、あるいはこの一行の責任者と勘違いしたのかも知れない。

とにかく、地方自治法や行政法、制度的なことをななどを執拗に問われた。一種の嫌がらせである。恵美助が質問攻めにあっている際、ふと左右を見てみると、吉右衛門たちは消えていなくなっているのである。ありや、逃げられた。

仕方なく、恵美助は一人で農林課長の嫌み説教を受けることとなる。

これで大袋の住民が水害に悩まないのならお安いご用だ。

そう思えば、嫌みも説教も、痛くもかゆくもなくなった。

かくして、夏川機関場第二機場の建築が始まった。従来の失敗を踏まえて、恵美助は設計段階からどうやれば水害を防げるかを念頭に、精力的にこの事業に関わった。そして、三年で完成させるのである。ちなみに、何もせず予算がつくのが遅れた下流石越町の機関場ができたのは、七年後のことである。

第二機場が完成してから現在に至るまで、大袋地区が水害にあったことは一度たりともない。水害をなくすという恵美助の夢が実現したことになる。

今でも、夏川機関場の石碑には、当時建設に尽力した人々の名前が刻まれている。その中には当然「三浦恵美助」の名前がある。

夏川機関場建設での手腕が認められた恵美助は、更に大きな仕事を任せられることになる。三迫流域全での土地改良に関する事業に携わることになったのである。

三迫といえば、夏川よりも遙かに大きい。流域も栗駒町から石越町までと、ほとんど栗原郡(現・栗原市)全域が入っていた。広大な金成耕土の多くがこの事業対象であった。その面積、千町歩。実に、水田一万枚の規模である。

三迫土地改良区の設立に向けて、準備委員会の役員に選任された恵美助は、栗駒から石越まで、流域の住民の説得に当たる。

当時金成耕土は基盤整備が遅れており、大規模な工事を必要としていたのである。

無論、大規模な事業のために、様々な権益が絡み合い、容易に判子が集まらなかった。それでも恵美助たち役員たちは、昼夜を問わず各地の集会所などに赴き、住民たちを説得するのである。その努力が実り、晴れて三迫土地改良区が設立される。後に、恵美助はこの理事長として、基盤整備の指揮を執ることとなる。

このように、確実に実績を重ねてきた恵美助と町長の吉右衛門とは互いに認め合う仲間になっていた。そんな吉右衛門から何気なく助役就任の打診を受けた恵美助であったが、町の権力状況なども考え、この要請を婉曲に断っている。実を言えば、これ以上の権力欲は恵美助にはなかった。自分は実務の人だということ恵美助は承知していたのだ。

実はこの時期、恵美助は株式投資を始めている。元来、野菜相場や豚相場などで相場を読むのに長けていた恵美助にとっては株式投資は性に合っていたのだらう。無理をせず、堅実に資産を運用していた。また、バブルへと向かう時期でもあったので、これもおもしろいほどに儲かった。あるいは、このような面で新しい興味を得たために、政治はこれくらいいいという思いもあったのかも知れない。

ちなみに、恵美助は株式運用についても先見性を発揮した。2008年10月のサブプライムショックによって、株は暴落するのであるが、それ以前に恵美助は株式から完全に手を引き、現金化していたのである。

恵美助にとつて、衝撃的な事件が起きた。

昭和63年のことである。

その事件の発端は10月23日に、吉右衛門町長が行方不明になったということだった。

「なんだって？」

その情報が恵美助の元にもたらされたとき、恵美助は他の人たちと同様に、ただ単純に驚いた。吉右衛門が行方不明になる心当たりがまるでなかったのである。

事件に巻き込まれたか、あるいは自ら姿を消したのか。

現役町長が行方不明になったということで、このニュースは当時全国版として日本中に配信された。連日のようにテレビや新聞で報道されたのである。

吉右衛門と恵美助が盟友関係にあったことは周知の事だったので、恵美助ならば何か知っているのではないかと、関係者からも報道陣からも聞かれたが、恵美助は本当に何も知らなかった。

行方不明から数日後の10月28日、吉右衛門は遺体で発見された。発見されたのは鷺沢の山林の中であった。自らの自動車で、排気ガス自殺をしたのである。

そこは栗駒山麓の、雑木林を切り開いた実に寂しい場所だった。切り開かれた台地の周囲は見渡す限りの森林である。

何を思つて自殺したのか。

なぜ自分に一言の相談もなかったのか。

恵美助は苦悶したが、答えるべき人はもうこの世にいなかった。
快活な人であった。

周囲に希望とやる気を与える人だった。
小さい体からは、常に情熱があふれ出ていた。

それだから、町民に慕われたのだ。

なのに、自殺とは……。

自殺の理由について、ゼネコン入札に関してではないか、女関係ではないか、と諸説入り乱れたが、今なお明らかになっていない。誰にも何も明かさずに、吉右衛門は自殺したのである。

吉右衛門に関する思い出は数多くある。その中でも、一関のそばの名店、直利庵でのことは忘れられない。

「直利庵にはじめて連れてってくれたのが、町長さま。あんなだけ小さいのに、大盛りをべろりと二杯たべるんだもんや、びっくりしたっちゃ」

あるいは、恵美助がそう言った明るい場面を思い浮かべるのは、今でも吉右衛門が亡くなったことを、ある一面で悔しく思っているからなのかも知れない。恵美助は今でも直利庵には家族と共に訪れている。

近しい吉右衛門が亡くなってから、あまり交友のない菅原郁夫が新しく町長となった。吉右衛門の元で助役をやっていた人である。

それでも恵美助は四期目に町の監査委員を務めるなど、最後まで町の住民のために尽力する。町の財政の番人に、恵美助ほどふさわしい人材はなかった。完全に実務の人であり、また数字に長けた人であるゆ

えに、適役であった。また恵美助にとっても面白い仕事であった。

四期、十六年をもって恵美助は政治の世界から引退する。周囲から惜しむ声もあった。が、恵美助にしてみれば、やりきったという感覚の方が大きかった。

ちょうど、この物語を執筆するために筆者が恵美助の元を訪れ、取材をしている最中、幾度となく来訪によって取材が中断させられた。栗原市議会議員の選挙が始まるうとしていたのである。

候補者たちが、市の至る所から事務所開きには是非恵美助さんに来てほしいと平身低頭で頼みに来た。それが一人や二人の話ではない。

それを見ても今なお隠然たる影響力を有しているのは明らかである。

町に出て役場に行っても、農協に行っても、恵美助を見つけて頭を下げ、挨拶に来る人は後を絶たない。

これは自分が思っているよりよほどすごい人なのかも知れない、と筆者は改めて思った。

挨拶が遅れて恐縮であるが、実を言えば筆者は恵美助の孫である。長女幾子と婿養子俊伸の間にできた長男であるから、恵美助にとつての初孫である。尋常にないほどに愛情をかけられ、今なおそれが続いている。

実は孫の筆者は、議員時代の恵美助に多くの場所に連れて行かれ、多くのことを目にしている。ゆえに、恵美助について立体的に描けると思えるので、しばしの筆者視点にご辛抱願いたい。

僕は祖父恵美助に連れられ、他のお宅にお邪魔しても、祖父のあぐらの中で静かに座っているような子

だったというから、連れて歩く方としても手がかからなくて良かったのだろう。

若柳町役場には何度連れて行かれたかわからない。僕にとつて、役場は楽しい遊び場所であった。職員は議員だった祖父に対して極めて丁寧で、僕に対しても同様だった。町長室などに多く行った覚えがある。ジュースやお菓子を出され、気持ちのいい、皮のソファーに座る。あの一荘荘厳な雰囲気が好きだった。町長の吉右衛門は、僕にも優しくかったように思える。怖いという記憶は微塵もなく、いいおじさんだったという、陽性のイメージしか残っていない。町長室だけではなく、三浦家においても吉右衛門と会った記憶があるので、祖父は町長と頻繁に会っていたのだろう。

ちなみに、吉右衛門が祖父に教えたという、一関のそば屋の名店、直利庵には、帰省する度に僕も通っている。

町長吉右衛門が亡くなったのは、僕がまだ小学生だったときのことだった。知っている人だったので、幼いながらも衝撃を受けたことを覚えている。おそらく、そのとき祖父は人には見せなかったが、相当のショックを受けていたことだろう。

祖父が建設委員長としてその設立に携わった衛生センターにも、小学生時分に何度か連れて行かれたことがある。伊豆沼にほど近い場所に建てられた、大きく真新しい建物だった。

もつとも記憶に残っているのは、中がエアコンで涼しかったことだ。当時としてはエアコンがかけられているというのは珍しかったのである。ここでも、祖父の孫ということでVIP待遇を受けた。

祖父が理事長を務めていた、三迫土地改良区には何度も行った覚えがある。理事長席に祖父が座ると、なんだか別人のように偉い人に思えたものだった。ここは今思えばアットホームな職場で、テレビで高校

野球が流されていたのを覚えている。これはもしかして高校野球ファンの祖父の影響だったのかも知れない。

祖父が町の監査委員を務めている時などには、たまに具合が悪くて公立病院などに行くと、普通ならば一時間も二時間も待たなければならぬのに、待たずにすぐに呼ばれた。母などは周りに申し訳なくて嫌だったというが、僕は単純に便利でいいな、と思っていた。

入学式や卒業式には、来賓席にいつも祖父の姿があった。それが、僕にとって誇らしくあり、自慢でもあった。

また、町で友達と遊んでいるときでさえも、たとえば駄菓子屋のおじさんと話すときのこと、「何処から来たのや？」と聞かれたのに対して、大袋、と答えると、「大袋の何や？」と聞かれたのに対して、三浦、と答えると「あ、んで、恵美助さんの所の孫でねえか」という風に急に相手の態度が改まるということがよくあった。おもちや屋などでもそうだったように思える。当時、若柳町には「大袋の恵美助さん」を知らなかった人はいなかった。

祖母の智恵子などは「私はやんだった(嫌だった)」と顔をしかめるのだが、僕は実を言うと選挙が好きだった。僕にとって、連日連夜のお祭りだった。町中に祖父のポスターが貼られ、家に帰ればチョココーンなどのお菓子が食べ放題だったし、ジュースは飲み放題だったし、本当に多くの人が出入りして、楽しくて仕方がなかった覚えがある。

つまり、祖父は幼き日の僕にとって、自慢であったのだ。

年をとっても若く、風采もさほど衰えず、背広を着ると「びっと」なる祖父は、孫の僕から見ても実に

格好が良かった。

この物語を書くという機会を得て、今まで全く知らなかった祖父についても知ることができた。僕にとつてもそれはかけがえのないことだったと思う。

終章
人間、
三浦恵美助

恵美助は三浦家の総領として生まれ育った。その意味において、生まれながらにしてリーダーであった。また、父の兵助が体を壊したために早くに家長にならざるを得ない状況にあったとも言える。

ともかく、恵美助の一族の長としての役割は、まるで封建時代の総領のごとくであった。昔ながらの「本家の旦那様」として、恵美助は申し分ない役割を果たした。

「恵美助さんなら何とかしてくれるかも知れない」

近しい親族はもとより、母の実家や分家の親戚、あるいは会ったこともないような遠い親類からさえも、恵美助は頼られた。

恵美助は面倒なそぶりを見せることなく、その全てに對して的確に對処した。あるいは、困った人の面倒を見ることは自分の使命だと考えているふしがあったのかも知れない。

横座に堂々と鎮座し、一人であるときでさえも、姿勢を崩すことのない恵美助の風采は、頼る者に絶大な安心感を与えた。

「よし、わかったおれが何とかしよう」

そう恵美助にうなずかれると、相談者はほつとしてようやく愁眉を開くのである。

答えないことを自分でも潜在意識的にはわかりつつも、誰かに相談しなければ気が済まない人というのも、今の世の中には多くいる。

恵美助はそう言った人の話もよく聞いた。よく聞いて、わかった、と恵美助がうなずけば、答えを得られなかったとしても相談者はすつきりしてしまいうのである。

恵美助は古き良き時代の家父長制を体現する、三浦家にとつて最後の継承者なのかも知れない。都会型の核家族が進む中、こういった一族の長老的な役割を果たしてくる人が徐々に少なくなつてくるのは寂しい限りである。

恵美助が一族内に築き上げてきた信頼を、婿の俊伸も、勿論孫の筆者も、やろうと思つても到底継承できざるはずがない。

さて「人間、三浦恵美助」として終章にもつてきたのは、これまでできるだけ恵美助の年表を踏まえて物語を書いてきたのであるが、そうした側面からは捉えられない多くのことがあり、それをどうしても記しておかなければならないと感じたからである。恵美助の人となり、そしてどうやってその人となりが形成されたかを知ることによつて、この物語はきつと奥行きを増すことだろう。

これまでの物語において、筆者は恵美助を「実務の人」あるいは「数字に長けた商才の人」と紹介してきた。

その一方で恵美助には間違いなく文化面を愛する側面があつた。

たとえば、恵美助は六十代のころに小説執筆にチャレンジしている。実を言えば、本物語の題名はその時恵美助が執筆した『滴』という小説に由来している。

懸命に書きすぎ、腱鞘炎を起こして結局は完成を見なかつた作品であるが、筆者はその下書きを見せてもらったことがある。

「しづく」とは栗駒山の懐奥深くにある、実在する迫川の源流のことである。栗駒山に登山に出かけた早瀬という若い男が、遭難し、仙人に出会い、人生のなんたるかを教えられて新たに生きる力を得るといふ

内容だった。

若い頃から本に親しんでおり、読む種類は多岐に及んでいた。思想や政治経済にいたるまで実に幅広いジャンルの本を読んでいたことは、前にも述べたとおりである。それに加えて、恵美助は小説を好んで読んでいた。古典文学はもちろんのこと、宮尾登美子や五木寛之、あるいは最近では宮部みゆきなどを好んで読んでいた。

また芥川賞最年少受賞で話題となった、綿矢りさ、金原ひとみの同時受賞の際などは、両方を読み比べ、綿矢りさの『蹴りたい背中』よりも、金原ひとみの『蛇にピアス』の方が格段によかったなどという見解を披瀝している。つまり、かなり本に造詣があったのである。それが、執筆欲につながったものと思われる。

また、最近では瀬島龍三の『回想録』や堂門冬二の『勝海舟 人生訓』、養老孟司の本などに感銘を受けている。

さかのぼれば、終戦まもなくには思想家の徳富蘇峰の『勝利者の悲哀』に多大なる影響を受けた。第二次世界大戦の局面において、ソ連、中国などの共産圏の防波堤となりえる日本をつぶすことはアメリカにとつて利益にならないとの思想を展開した、先鋭的な本で恵美助は議員になるときにはこの影響を多分に受けているのである。

つまり、恵美助とは確かに数理に強い人であるが、完全なる文人でもあったわけである。

趣味について誰もが知るものとして将棋があるが、これについては人間らしい側面を見せる。

あれだけの先見性を見せ、数字につよい恵美助であったが、どうも基盤の先を読むのが苦手と見える。

弟子であったはずの筆者はもとより、三女静恵の長男、龍に負けることも珍しいことではない。

「ほでもな、じいちゃん、雑誌や新聞を見て将棋を研究してるんだぞ」

と智恵子が忍び笑いしながら楽しそうに言うように、それが人間性として味になってるので悪くない。三人娘がそろって述懐するように、若い頃の恵美助は、仕事の鬼のような人であり、話しかけるのさえも怖かったという。孫ができてからというもの若干マイルドになったとはいえ、やはり威厳という面で今なお衰えるところを知らない。

恵美助が横座に堂々と鎮座している姿は、あたかも三浦家の幸せが風になびかないように置かれた文鎮のごとくである。

この重しがあるからこそ、三浦家の幸せは今も昔も揺るがないのである。

駆け足でここまでできた、恵美助の物語であるが、恵美助の生き方には三浦家の人々のみならず、普遍的に誰にも通用する哲学があった。

まず、第一に必死になって働くということ。

自ら注射を打ちながら休まずに懸命に働いた鬼神のごとき迫力は、今に生きる、また未来に生きる誰もが学ぶべきであろう。

そして、第二に、家族を守ること。

当たり前のようで、これができない世の中である。この業績だけを見ても、恵美助は英雄と言えるのではなかろうか。

何も、教科書に載ったり、年表に載ったりする人だけが英雄・偉人ではない。我々の身近にも、語るべ

き英雄がいるのである。

そう言った意味で、この物語の主人公、三浦恵美助もまさに英雄だった。

これを読む人に、最後に筆者からお願ひがある。お願ひというより、提案と言ふべきか。

この物語を知り、もし恵美助の生き方に感銘を受けたのであれば、自分の子や孫に、この物語を受け継がせてはどうだろうか。

仕事に悩むとき、学校に行くのがいやになったとき、恵美助の働く姿を思い浮かべれば、きっと自分の悩みが如何に小さいかを実感できるだろう。

春ただ中、風が心地よく、日射しは色鮮やかである。

開け放たれた縁側からは、柔らかい風が舞い込んできて、廊下で体を伸ばす、飼猫のチャコのひげを微かに揺らす。チャコはしっぽをくゆらせ、光に満ちる外を見据える。

その視線の先にはまるで、スローモーシヨンのように風に翻る白い洗濯物がある。

向こうから、シヨキ、シヨキ、と枝切りばさみの音がする。恵美助が、庭の植木の手入れをしているのである。

けれども、心地よさにうつらうつらしているチャコの目は、その姿を捉えることはない。ただ、ピンと立てられた耳はしっかりと音拾っている。

「あんだ、苗に水かけたの？」

土にこもる声が遠くから聞こえてくる。

畑から帰ってきた智恵子である。

「おう、やったよ」

恵美助の声がする。

「あったかくなってきたから、ビニール開けないと」

「ああ、わかってる」

シヨキ、シヨキ、シヨキ、と心地よい音がする。

それがチャコを更なる眠りに誘う。大きくあくびをし、目を閉じて手の上に首を伏せる。

ふう、と鼻息をひとつ吐き、寝に入る。

穏やかな日常、何ものにも代え難き平穏である。

これが、恵美助が手に入れた幸福の時間である。

大河は一滴のしずくより発する。

そして、いずれは大海原へと合流し、普遍と化す。

この三浦恵美助という一人の人間より発せられた命の連なりは、やがて大きな流れとなることだろう。その流れが、また様々な物語を彩なすことだろう。

八十年を振り返って

三浦恵美助

誰にでも波乱と曲折がある。過去・現在・未来へと続く、そういった苦難の連なりが、あるいは人生そのものと言えるのかも知れない。

小生はまず妻、子供、孫、兄弟姉妹の家族に恵まれた。曾孫たちの笑顔や走り回る姿を見られることは望外の喜びである。

また壮年期においては地域の人々の推挙を賜り十六年亘り、先輩・友人・後輩と共に議会活動を全うすることができた。特に三迫川沿岸土地改良区の設立に当たっては、初期の同意を得るために西は栗駒から東は花泉、石越まで奔走したが、その事が現在の大規模な基盤整備に繋がっていると思うと、感慨もひとしおである。未だその全貌が見えないこの事業こそは、私の議員活動の最高の資産と言えるかも知れない。人にはそれぞれ器というものがある。それは様々な人との関わり合いによって形成されると考えられる。つまり、自分の器は生涯磨き続けることができるのである。

果たして、二十一世紀はどう変わるだろうか。先のことまでは誰にも見通すことはできないが、私は色鮮やかな未来が待っているものと信じるものがある。

平成二十一年五月二十日

三浦 恵美助

滴 ～三浦恵美助物語～

『滴〜三浦恵美助物語〜』

二〇〇九年六月一五日

第一刷発行

二〇〇九年六月三〇日

第二刷発行

発行者 三浦崇典

発行所 株式会社東京プライズエージェンシー

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-47-4 302号

電話 03-6914-2475

印刷所 恒信印刷株式会社



【”SIGRE-HIKO”について】

(株)東京プライズエージェンシーは、夢を追う若者達のサークル“SIGRE-HIKO”の活動を全面的にサポートしております。

皆様からいただいた収益の一部は彼らの夢を後押しするために使わせていただいております。

また”SIGRE-HIKO”では本気で何かを目指す仲間を随時募集しております。興味のある方は下記まで連絡ください。当社が責任をもってサークル支配人に取り次ぎます。

メール：master@tokyoprizeagency.com

ホームページ：<http://tokyoprizeagency.com/>

